「広島大学調査室」設置される

一九九一年の大学設置基準等の大幅な緩和・弾力化、いわゆる大綱化に伴い、本学でもカリキュラム改革や大学院の整備・充実に向けての検討が精力的に行われているが、これら大学改革をより一層推進するため、四月一日付けで調査室が設置され、大学改革や自己点検・評価のための各種情報収集及びアンケート調査の実施等の業務を行うことになった。

調査室は事務局が移転するまでは、東千田キャンパスの事務局庁舎一階（元の厚生課）と東広島キャンパスに分かれて執務にあたることになっており、調査室長として、自己点検・評価委員会の田村達堂委員長が就任した。

理学部の尾崎卓美主任技官が日本化学会化学技術有功賞を受賞

理学部特殊加工技術開発室・ガラス素材応用部門の尾崎卓美（おざき・たくみ）主任技官が、三月二十八日～三十一日に東京で開催された「日本化学会第七十春季年会」において、優れたガラス加工技術で「多角形ガラス管の製作における新技術の開発ならびにガラス細工をとおした化学研究および化学教育への貢献」をしたことにより日本化学会技術有功賞を受賞した。

附属図書館、整備計画が公表される

附属図書館運営委員会（委員長＝前田文之附属図書館長・理学部教授）では、このほど「附属図書館 短・中期整備計画」を発表した。

この整備計画の骨子は大きく分けて、図書館の心臓部とも言える図書資料の充実と利用者サービスの二点から成っており、特に図書資料の充実としては、従来の収集方針を踏襲していくほか、視聴覚資料や今後増加が予想される電子媒体資料の収集方針の検討などに取り組むとともに、検索システムの電子化が検討されている。

中央図書館

また、利用者サービスの拡大として、医学分館の増改築、夜間主コースのための東千田分室の整備、カードによる閉館時の入・退館システム、日・祝日開館や平日の開館時間延長、情報発信基地として学術情報提供サービスの強化について検討を始めることになっており、図書館の要員や必要経費の確保のほか、学内の協力が得られることが成功の鍵と言える。

学位記授与式、三九九四名が社会に巣立つ

三月二十六日(火)午前十一時から、東広島運動公園体育館で平成七年度学位記授与式が行われた。

学部卒業生二八七二名、専攻科修了生二十一名、大学院博士課程前期及び修士課程の修了生九〇六名が学窓を巣立った。

超氷河期といわれるなかの今年の就職率は、三月十五日現在で学部卒業生が七六・八%、大学院博士課程前期（修士課程）で八九・二%となっており、今年始めて修了生が巣立つ国際協力研究科では一〇〇%となるなど健闘が目立った。

三月二十七日(水)には、大学会館大集会室で博士学位記授与式が行われ、一九五名に博士学位記が授与された。

東広島市運動公園体育館

追悼

高山一十先生を偲ぶ

名誉教授高山一十（たかやま・かずとお）先生が去る三月九日、呼吸不全のため八十六歳で逝去されました。

先生は昭和十年広島文理科大学史学科西洋史専攻をご卒業後、陸軍幼年学校教授、広島高等師範学校教授、広島文理科大学助教授を経て、昭和三十年広島大学文学部教授に昇任され、昭和四十八年停年で退官されるまで、永きにわたって西洋史の研究と教育に専念されました。この間、大学紛争期を含めて二期の文学部長、学長代理などを務められ、日本学術会議会員など学内外で活躍されました。

先生のご専門は西洋古代史、とりわけ古代ギリシア社会史の研究でありました。独自のヒューマニスティックな社会史の方法論を構築され、その手法によって大著『ギリシア社会史研究』（未来社）を始めとする多くの優れた論著を公刊されました。また、歴史教育、歴史学研究法にも優れた業績を挙げられました。

ご退官後も精力的に論文執筆や著書の公刊に励まれ、後進に無言の刺激を与え続けられましたが、同時に福山大学で教養部長、図書館長、副学長を務められ、平成四年名誉学長として引退されました。これらの業績に対して中国文化賞や叙勲の栄誉に浴されましたが、先生はつねに自分の持ち場に誠実に対処され、われわれはその後ろ姿に導かれてきたところがあります。

先生のご冥福を心からお祈りいたします。

文学部西洋古代中世史講座　向山　宏（むかいやま・ひろし）

武口尚義（ひさよし）事務長のご逝去を悼む

事務長はあと二十日足らずで定年を迎えようとされていたのに、三月十二日、帰らぬ人となられました。誠に痛惜の情に耐えません。

ここ一年余り、職場では痛々しいお姿ながらも職務に全精力を傾けておられ、弱音も吐かれたこともなく、本当によく頑張ってお務めを果たされておられました。さぞ辛く、苦しい日々であったことと思います。

ご自分は病を知りながら、それに打ち勝とうとして敢然と立ち向かわれたお姿は驚嘆の思いがいたし、事務長の強靭な精神力に感心するばかりでした。しかしながら、こんなにも早くご逝去の悲報に接しようとは、ただただ人の世の無常を痛感しております。

事務長は昭和三十二年広島大学庶務課に奉職され、以来三十八年余り大学行政に携わられました。その間、職場においては豊富な知識と旺盛な責任感をもって迅速かつ的確に事を処理されるなど終始誠心誠意その職務を遂行され、同僚、部下はもとより教官の信望も厚く、多くの人々に敬愛されておりました。

総合科学部では事務長として平成五年の東千田キャンパスから東広島キャンパスへの移転事業、平成六年の総合科学部二十周年記念事業、平成七年の大学院生物圏科学研究科十周年記念事業など多くの行事が立て続く中、的確な陣頭指揮をとられ、よく学部長を補佐し、滞りなくこれらを完了されました。また、その事業のさなかにおいても広島大学の教養的教育を含む大学改革に取り組まれておりましたが、改革途中で病に倒れられ、さぞ心残りではなかったかと思います。事務長の遺志と教訓は、多くの後輩たちの心の中に生き続けると思います。

事務長の清廉潔白なお人柄を偲び、ひたすらご冥福をお祈りいたします。

文学部　松浦和夫（まつうら・かずお）